

史跡本願寺境内・

平安京左京七条二坊十町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡本願寺境内・
平安京左京七条二坊十町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかっていく事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび防災センター新築工事に伴う史跡本願寺境内・平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 7 月

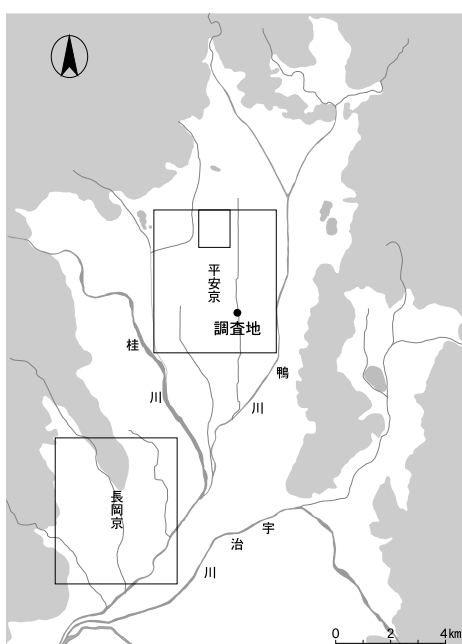
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 本願寺 代表役員 不二川公勝 |
| 4 調査期間 | 2007年5月22日～2007年6月27日 |
| 5 調査面積 | 110 m ² |
| 6 調査担当者 | 近藤章子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 挿図順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 近藤章子 |
| 17 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・山口 眞 |

(調査地点図)



目 次

| | |
|-------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| 2. 位置と環境 | 1 |
| (1) 位置と環境 | 1 |
| (2) 周辺の調査 | 2 |
| 3. 遺 構 | 3 |
| (1) 遺構の概要 | 3 |
| (2) 平安時代の遺構 | 5 |
| (3) 鎌倉時代の遺構 | 5 |
| (4) 室町時代の遺構 | 6 |
| (5) 江戸時代の遺構 | 7 |
| 4. 遺 物 | 10 |
| (1) 遺物の概要 | 10 |
| (2) 土器類 | 11 |
| (3) 瓦類 | 13 |
| (4) 銭貨 | 13 |
| 5. ま と め | 15 |

図 版 目 次

| | |
|--------|---------------------|
| 図版1 遺構 | 1 室町時代以前の遺構面全景（北から） |
| | 2 江戸時代の遺構面全景（北から） |
| 図版2 遺構 | 1 井戸1（北から） |
| | 2 井戸2（北から） |
| | 3 井戸21（東から） |
| | 4 井戸69（西から） |
| 図版3 遺構 | 1 建物1の柱穴11（南から） |
| | 2 建物1の柱穴12（南から） |
| | 3 建物1の柱穴9（東から） |
| | 4 柱穴37（北から） |
| | 5 柱穴49（北から） |
| 図版4 遺物 | 出土遺物 |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|--------------------|----|
| 図1 | 調査前全景（西から） | 1 |
| 図2 | 調査風景（北から） | 1 |
| 図3 | 調査位置図（1：2,500） | 2 |
| 図4 | 調査区配置図（1：1,000） | 2 |
| 図5 | 室町時代以前の遺構実測図（1：80） | 4 |
| 図6 | 東西セクション断面図（1：50） | 5 |
| 図7 | 井戸69実測図（1：40） | 6 |
| 図8 | 土坑27断面（東から） | 7 |
| 図9 | 江戸時代の遺構実測図（1：80） | 8 |
| 図10 | 井戸1・2実測図（1：40） | 9 |
| 図11 | 遺物実測図（1：4） | 12 |
| 図12 | 銭貨拓影（1：1） | 14 |

表 目 次

| | | |
|----|-------|----|
| 表1 | 遺構概要表 | 3 |
| 表2 | 遺物概要表 | 10 |

史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡

1. 調査経過

本調査は、本願寺防災センター新築工事に伴い実施したものである。調査地は、本願寺境内の北東に位置し、阿弥陀堂門の北、堀川通沿いの築地塀に隣接する。調査直前まで参拝者用の便所があり、その建物図面から基礎による攪乱が著しいことが当初から予想された。

調査は、残土置場予定地のネットフェンスの設置などの付帯工事が終了した5月22日から開始し、6月27日に終了した。当該地は史跡であるため、京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課による現地視察・指導を受け、調査を進めた。

調査区は、建設予定の建物の範囲に合わせて設定したが、北側に既存の側溝があり、その部分を避けたため、調査面積は約110㎡となった。東側は築地塀の修復のための足場が組まれており、崩落の危険があるため、法面をやや大きくとった。また、壁際にコンクリート基礎が残存していたが、取り除くのは困難であると判断し、4箇所基礎部分を残したまま、調査区を設定した。当初の予想よりさらに攪乱部分が深く、遺構を確認できる箇所が限られた状態であった。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

当地は平安京左京七条二坊十町跡に該当する。平安時代前期に造営された官営市場である東市が、その後さらに発展して造営された外町の東および北に隣接する。鎌倉時代には市の跡地に踊屋が建てられ、踊り念仏が盛んに行われた場所である。室町時代には堀川小路西、七条大路北、大宮大路東、坊門小路南とされる本圀寺の寺域の東に隣接する。

近世になると、天正十九年（1591）に顕如によりこの地が選定され、豊臣秀吉の寄進によって、



図1 調査前全景（西から）



図2 調査風景（北から）

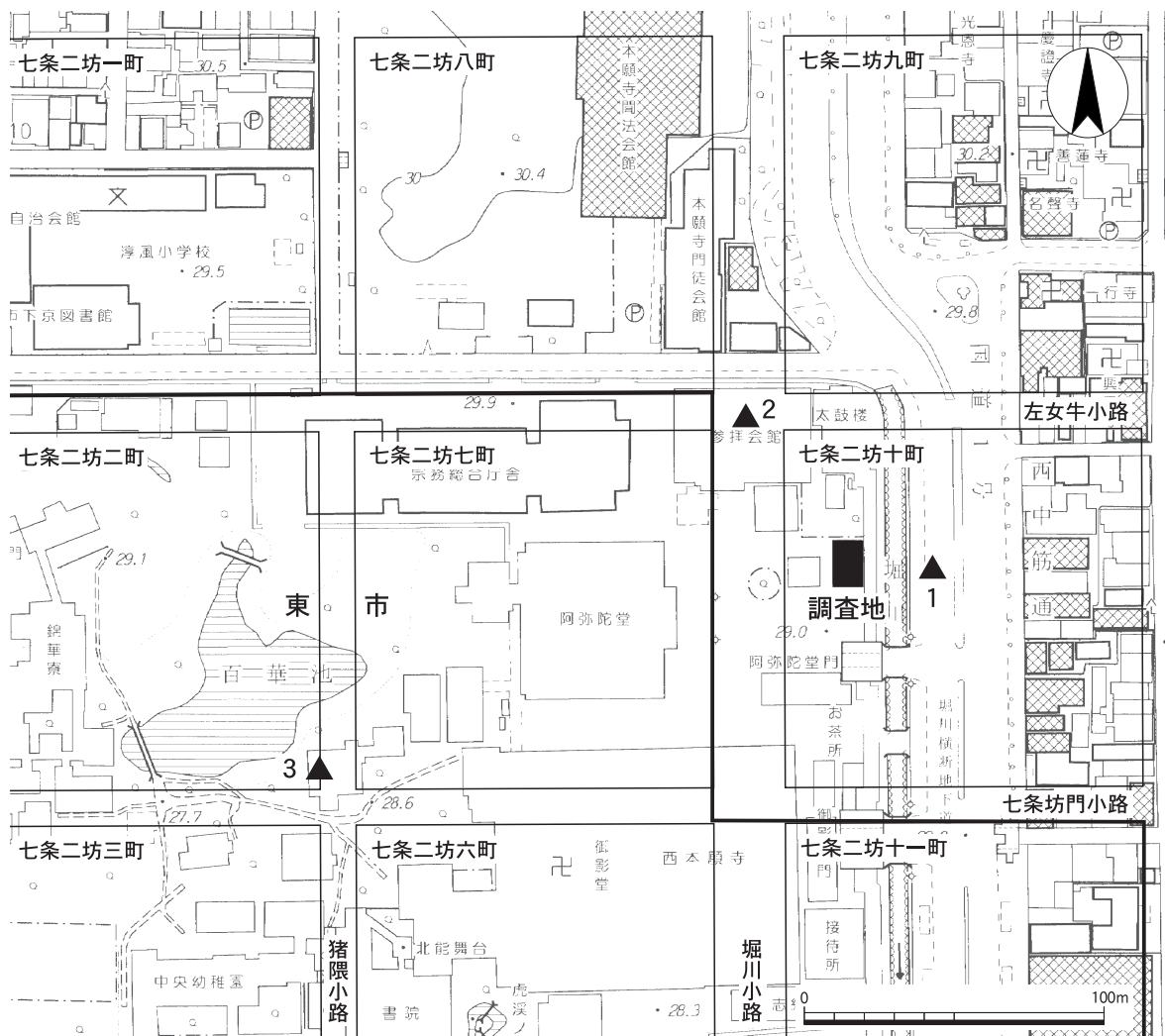


図3 調査位置図 (1 : 2,500)

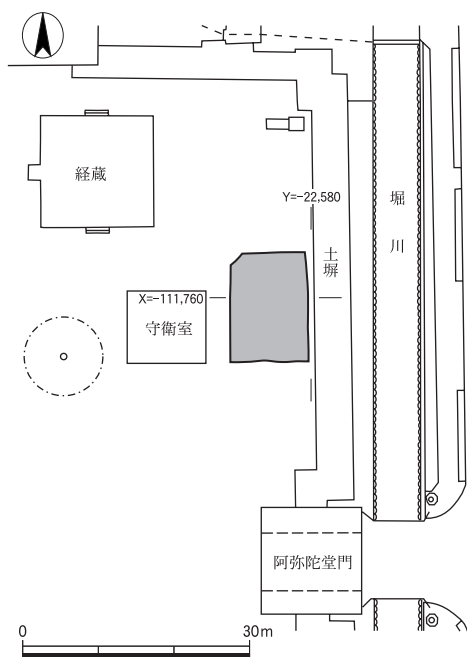


図4 調査区配置図 (1 : 1,000)

本圀寺の寺域の一部が浄土真宗の本山である本願寺となる。文禄元年（1592）に阿弥陀堂、御影堂が完成するが、慶長元年（1596）の大地震により諸堂が倒壊する。再建されたものの元和三年（1617）の火災により再び諸堂を焼失する。その後再建され、寛永の大改修を経て、現在までの400年余り、本願寺の寺域となっている。なお、平成6年には本願寺境内が史跡の指定を受け、世界遺産に登録されている。

(2) 周辺の調査

本願寺境内での調査成果としては、立会調査・試掘調査により平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の各時代の遺構、遺物が検出されている。2006年の境内での調査では、平安時代前期の東市関連の柱穴が

検出されている。また、鎌倉時代前期の猪隈小路西側溝が検出されている。(図3-3)

1986年に実施した堀川通での発掘調査¹⁾では、近接する七条二坊十町内の成果として、弥生時代後期の南北方向から直角に西に延びる溝や、古墳時代前期の土器類が自然堆積層上面で多数出土している。また、条坊関連の遺構としては、平安時代前期の左女牛小路南側溝、鎌倉時代前期の七条坊門小路北側溝が検出されている(図3-1)。

1995年に実施した発掘調査²⁾では、平安時代中期から後期の遺物、平安時代末期から鎌倉時代の堀川小路西側溝や井戸・柱穴・溝が検出されている。室町時代では大規模な護岸施設をもつ池やそれに伴う施設が検出されている。本願寺関連としては、造営当初の庭園遺構が検出されている。また、遺構に伴わないが古墳時代の遺物が多数出土している(図3-2)。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要(表1)

基本層序は、現地表下0.4mまで現代盛土、現代盛土下に江戸時代の整地層、現地表下0.65mにてにぶい黄褐色泥砂層の平安時代後期の整地層となり、この層の上面が基本的な遺構検出面となる。現地表下0.8mで、自然堆積層の黄褐色砂層と暗灰黄色砂礫層となる。平安時代後期の整地層が検出できなかった箇所では、この層の上面が遺構検出面となる。

調査区の四方の壁面は攪乱や江戸時代以降の土坑などにより、土層断面の観察が困難であったため、東西方向のセクションを設定し、断面観察を行った。

遺構は、87基検出した。主な遺構は、平安時代後期の土坑・柱穴、鎌倉時代の土坑・井戸、室町時代の柱穴、江戸時代の整地層・柱穴・井戸である。平安時代後期の整地層は、調査区南西部と北西部、中央部で検出した。鎌倉時代の遺構は主に調査区北東部で検出した。なお、井戸69の北側付近でこの時期の遺物を多く含む箇所があり、土色の違いなどから当初、遺構が重複していると考えた。しかし、これらのさらに下部に井戸状の落込があり、この底部から重機で掘削された痕跡を認めたため、遺構として取り上げなかった。江戸時代の整地層が残存するのは、調査区南西部のみであった。この上面で柱穴を検出したが、同一建物として認識できるものは南北・東

表1 遺構概要表

| 時 代 | 遺 構 | 備 考 |
|-----------------|--------------|-----|
| 平安時代後期 | 土坑、柱穴 | |
| 平安時代末期 ～鎌倉時代 | 土坑、柱穴、井戸 | |
| 室町時代 | 土坑、柱穴 | |
| 江戸時代 | 土坑、柱穴、井戸、整地層 | |

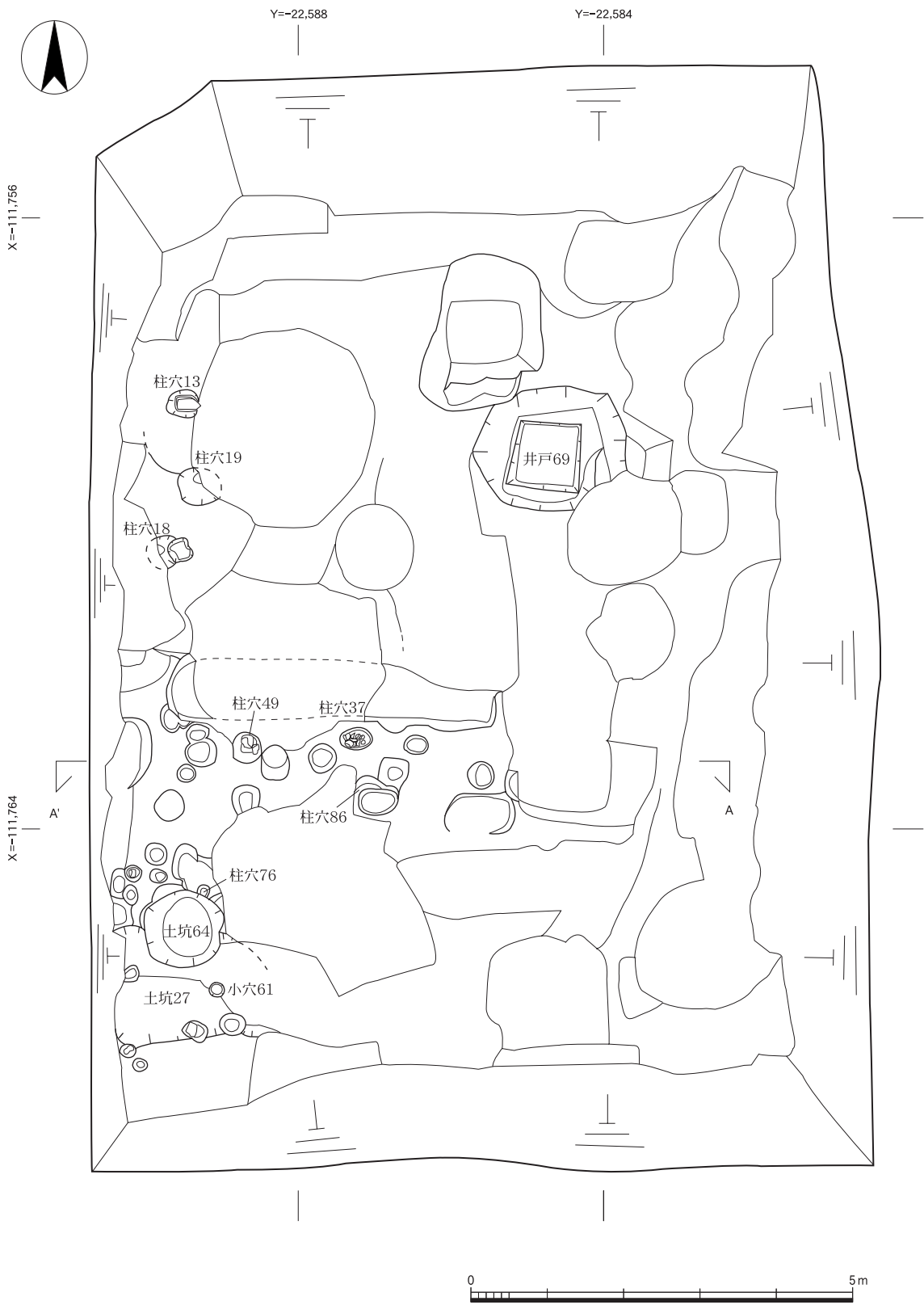


図5 室町時代以前の遺構実測図 (1 : 80)

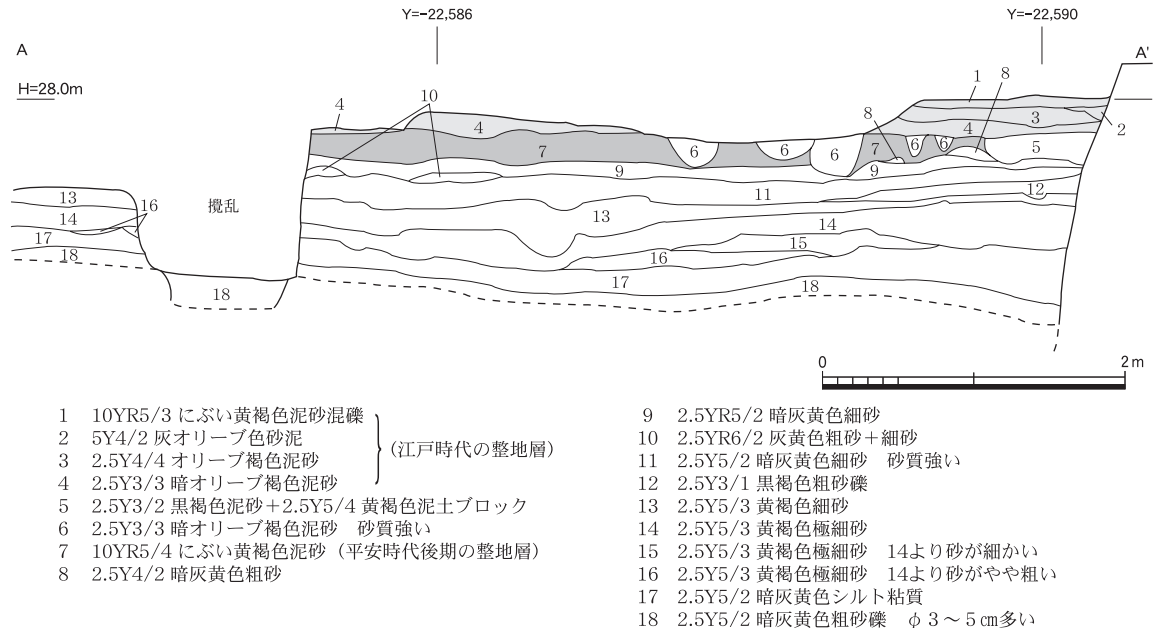


図6 東西セクション断面図 (1:50)

西に並ぶ1列のみにとどまった。

自然堆積層は、砂・粗砂・砂礫・シルト層などが水平に堆積し、自然流路の堆積であると考えられる。砂礫層の上面にはシルト層が0.2~0.3 mの厚さで堆積する。ある時期の澱みの痕跡ではないかと考えられる。最終的にはセクション北側を断割り、下層の砂礫層の観察を行った。その結果、さらにその最下層の砂礫層は、調査区西側に緩やかに下っていく状況がみられた。

(2) 平安時代の遺構 (図5、図版1-1)

小穴 61 調査区南西部の土坑 27 の下層より検出した。規模は径 0.18 m、深さ 0.18 m で形状は円形である。埋土は 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂層に炭が混入する。出土遺物は平安時代後期の土師器皿、瓦器椀、輸入青磁・白磁がある。上部の遺構により削平されているため、成立面が不明であるが、周辺では同様の小穴を検出しており、その小穴の標高は 27.7 m 前後である。

土坑 64 調査区南西部で検出した。南半部を土坑 27 に削平されている。規模は南北 1.0 m、東西 1.0 m で、深さ 0.75 m である。埋土は 2 層に分層でき、上層は 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂層に炭が混入する。下層は 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥層である。下層からは平安時代後期の土師器皿・椀・甕、須恵器鉢・甕、緑釉陶器椀、瓦器皿、輸入陶磁器が出土した。

(3) 鎌倉時代の遺構 (図5、図版1-1)

井戸 69 (図7、図版2-4) 調査区北東部で検出した。上部は南東部を江戸時代の井戸 24 に、南部・中央部は攪乱坑に削平されている。この井戸の北側周辺には、前述したように鎌倉時代の遺物が散乱していた。地山の砂層、砂礫層を掘り込む。掘形の規模は、南北 2.0 m、東西 2.1 m の方形で、深さは 1.43 m である。井戸枠の規模は、南北 0.9 m、東西 0.8 m の方形木枠組で、木

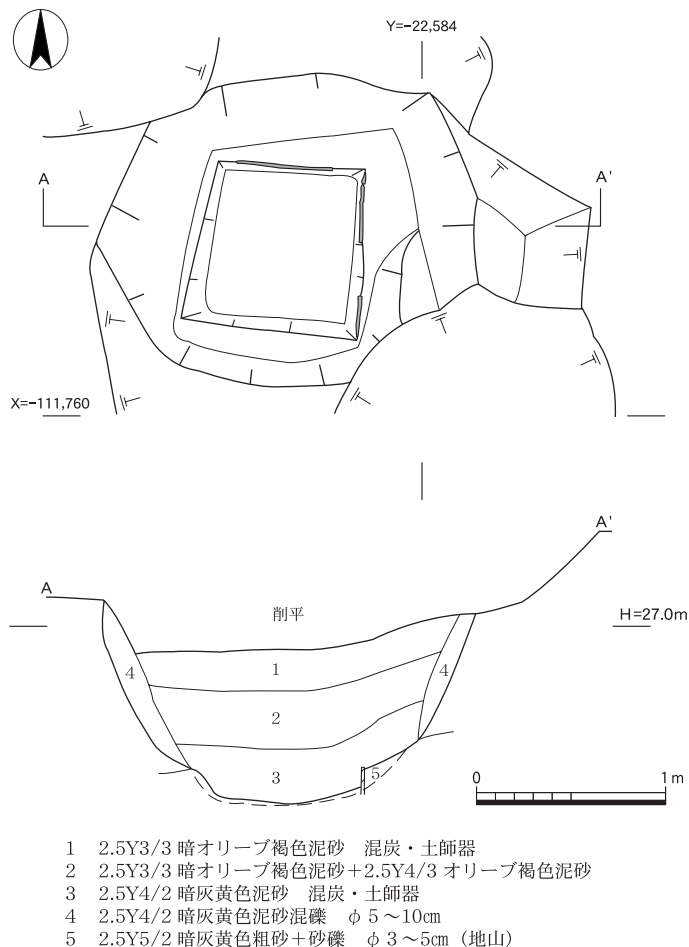


図7 井戸69実測図(1:40)

枠は北・東部の横板のみが1段分残存していた。底部の標高は26.07mである。埋土は3層に分層でき、上層は2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥層、中層は2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂層、下層は2.5Y4/2暗灰色泥砂層に炭が若干混入する。埋土からは土師器、須恵器、瓦器、輸入青磁・白磁・青白磁、焼締陶器甕、銭貨(宋銭)が出土した。平安時代末期から鎌倉時代前半の遺構である。

柱穴86 調査区中央付近で検出した。東部の一部を鎌倉時代の柱穴に、南部を室町時代の柱穴に削平される。残存規模は南北0.25m、東西0.4m、深さ0.18mである。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥層である。土師器皿、須恵器鉢・

甕、瓦器羽釜が出土した。

(4) 室町時代の遺構(図5、図版1-1)

柱穴49(図版3-5) 調査区中央南西寄りで検出した。東西0.35m、南北0.45m、深さ0.28mで、底部に根石が残存していた。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂層で、鎌倉時代後半から室町時代初頭の土師器皿が密に詰まった状態であった。しかし、ほとんどが破片で、復元できる皿はわずかであった。周辺では遺構が重複して検出されたが、このように多量の土器が包含されたものはない。

土坑27(図8) 調査区南西部で検出した室町時代前半の遺構である。東側は攪乱を受け、西側は調査区外となるため、東西の検出規模は1.6m、南北幅1.6m、深さ0.3mを確認した。埋土には赤変した焼土、炭を含み、下層ほど焼土が多い。径約0.25m、厚さ0.2mの焼土の固まり状のものが包含していた。攪乱坑である東側の窪みには、焼土と土器が散乱しており、少なくとも1mほど東に土坑が広がる可能性もあるが、削平されたときに散乱したとも考えられる。遺構の底面には焼け締まった痕跡などがなく、焼土・炭とともに他地点から運ばれ廃棄されたものであろう。出土遺物は、土師器皿・丸底鉢、須恵器、瓦器、輸入青磁・褐釉陶器、焼締陶器

がある。

柱穴 76 調査区南西部の土坑 64 の北側で検出した。径 0.28 m の円形の柱穴である。完形に復元できる土師器皿が出土した。この付近は遺構の重複が激しく、この柱穴も複数の柱穴・土坑と重複している。



図8 土坑 27 断面 (東から)

柱穴 13・18・19 調査区北西部で検出した。平安時代後期の整地層上面で検出した柱穴である。柱穴 13 は遺構の一部が削平され、根石が露出し

ていた。残存径は 0.4 m、深さ 0.14 m であった。柱穴 18 は径 0.34 m、深さ 0.3 m、柱穴 19 は東側が攪乱により削平されているが、残存径 0.5 m、深さ 0.17 m である。埋土はすべて 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂層である。平安時代末期から室町時代の土器が出土した。柱穴 19 からは釘が 1 点出

土した。

柱穴 37 (図版 3- 4) 調査区中央で検出した。南北径 0.27 m、東西径 0.42 m、深さ 0.1 m の楕円形の柱穴である。径 5～10 cm 大の石を 10 数個、根固め石として用いていた。埋土は 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂層である。出土遺物は極少量で、土師器と緑釉陶器の小片であるが、埋土が周辺の同時期の柱穴と同様のため同時期と判断した。

(5) 江戸時代の遺構 (図 9、図版 1- 2)

整地層 (図 6) 調査区南西部にのみ残存していた。整地層は大きく 3 層に分層できる。1 層目はにぶい黄褐色泥砂混礫、2 層目は灰オリーブ色砂泥、3 層目はオリーブ褐色泥砂である。土師器小片や礫を多数含み、版築状に整地されている。染付片や棧瓦などの小片も含まれているが、図示できるものはない。

建物 1 (図版 3- 1～3) 整地層上面で柱穴 5 基 (柱穴 8～12) を検出した。現状では南北 2 間 (1.8 m・2.1 m)、東西 2 間 (2.1 m・1.8 m) 以上の小型の掘立柱建物と考えられるが、攪乱のため全容は不明である。柱穴 9・11 には根石が確認できる。柱穴 12 からは棧瓦と共に径 5 cm 大の石が多数出土した。

井戸 1 (図 10、図版 2- 1) 調査区南東部で検出した。井戸枠専用で作られた瓦状のものを一段に 9 枚使用し円形に組む。下部 2 段が残存していた。径 0.77 m、深さ 1.0 m で、底部の標高は 26.0 m であった。井戸の埋土に漆喰の固まりが多数みられたことから、上部は漆喰で造られていたと考えられる。出土遺物はほとんどが棧瓦と井戸枠瓦で、染付、ガラス玉、寛永通寶四文銭が掘形から 2 枚、埋土から 4 枚出土した。その他釘・鋸・匙状の金属製品などがある。

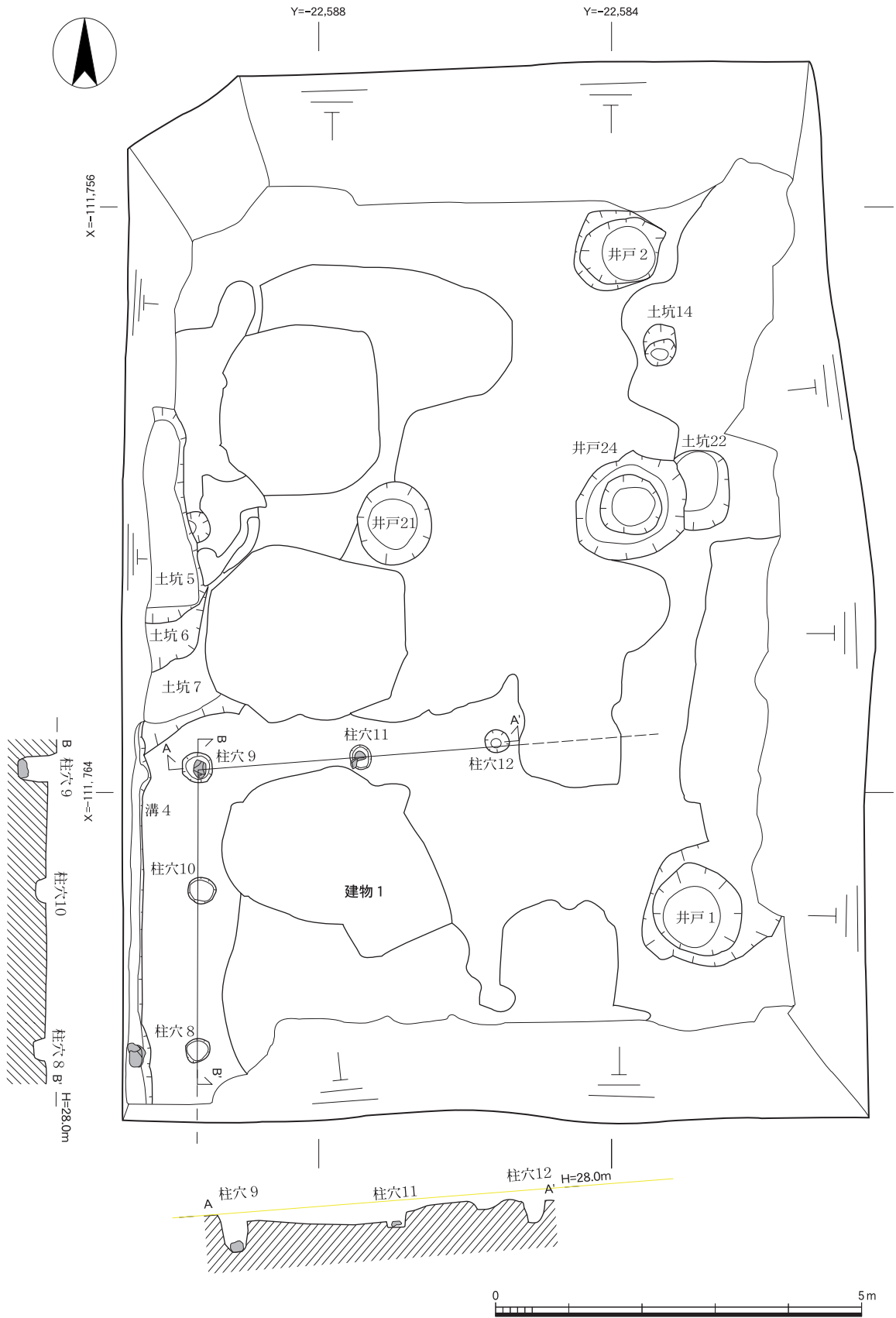


図9 江戸時代の遺構平面図 (1 : 80)

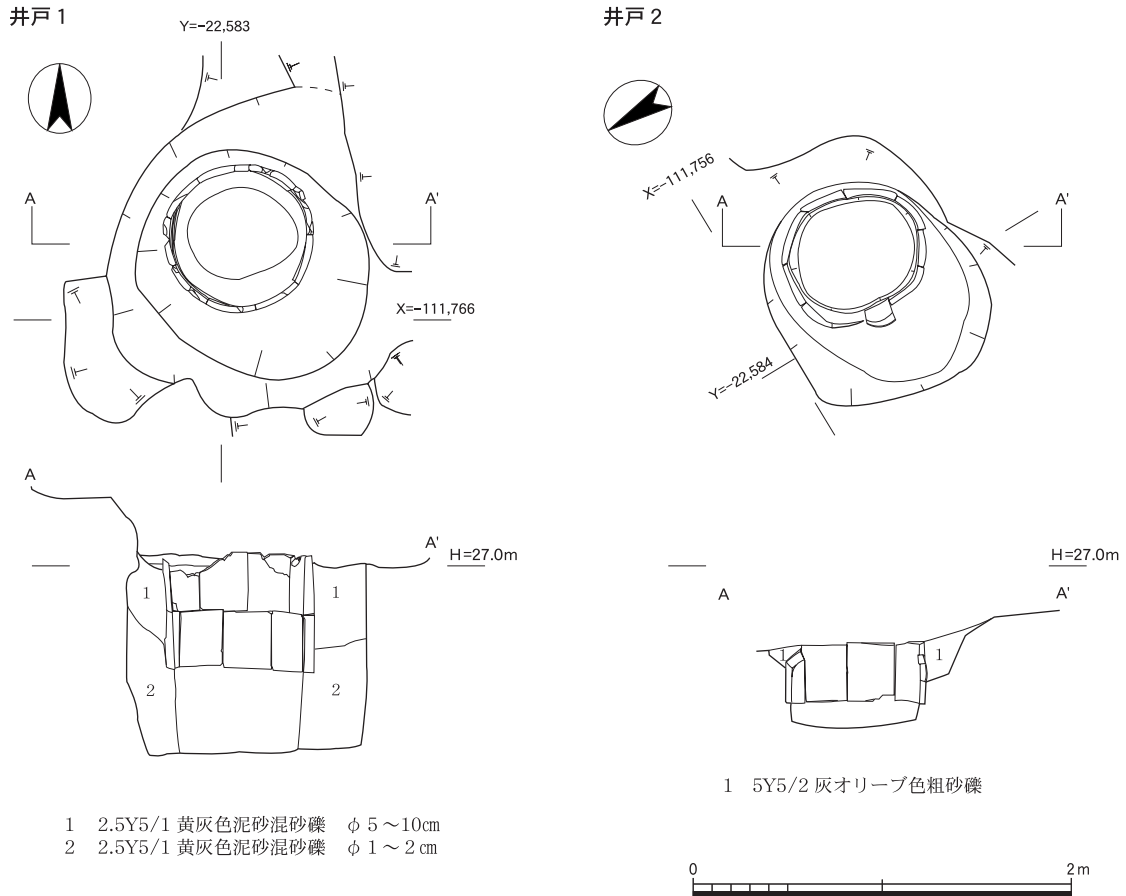


図10 井戸1・2実測図(1:40)

井戸2(図10、図版2-2) 調査区北東部で検出した。井戸1と同様の井戸枠構造をもつ。上部西半部は削平されていたが、井戸枠1段分が残存していた。径0.78m、深さ0.45mで、底部の標高は26.15mである。遺物は少量で土師器、染付が出土した。使用した井戸枠瓦は井戸1とほぼ同じものである。

井戸21(図版2-3) 調査区中央付近で検出した。規模は南北1.1m、東西1.0mのやや扁平な円形状で、井戸枠や掘形は検出できなかったため、素掘りの井戸であると考えたが、埋土から井戸枠瓦の破片が出土した。抜き取られた可能性もある。埋土はほぼ単一の層で、地山層を掘り込む。底部の標高は25.76mである。出土遺物は棧瓦が多数を占める。

井戸24 調査区東部で検出した。井戸69の南東部に接し、井戸69の掘形の一部を掘り込む。径1.5mの円形で、井戸枠は検出できなかった。埋土は暗褐色泥土と暗灰黄色粗砂層である。出土遺物は棧瓦が多数を占め、土師器、須恵器、輸入陶磁器、染付、施釉陶器などがある。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に25箱出土した。土器・瓦類以外に泥面子・伏見人形などの土製品、石鍋・砥石などの石製品、釘、銭貨が出土した。

1点であるが弥生時代後期前半の高杯脚部が出土している。砂礫層上面から出土した。

平安時代のものは遺構に伴うものはごく少量であるが、中期から末期の土器が出土した。土師器皿、須恵器蓋・杯・甕・壺がある。土師器皿では口縁部が「て」の字状のもの、コースター状のものもある。また、少量であるが緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。瓦器は椀と皿がある。輸入陶磁器は龍泉窯の青磁椀、玉縁口縁の白磁椀、青磁壺が出土した。

鎌倉時代のものは土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器羽釜・鍋、焼締陶器甕、輸入青磁・白磁の皿・椀、青白磁の合子、石鍋底部などが出土した。須恵器の鉢は東播系のものがある。また、宋銭の「嘉定通寶」（初鑄1208年）が井戸69から出土している。

室町時代のものは土師器皿・丸底鉢、瓦器椀・鍋、焼締陶器甕、瓦が出土した。中でも土師器の丸底鉢は土坑から多量に出土したが、完全な形になるものはない。

江戸時代の遺物としては、染付椀、陶器、泥面子、伏見人形、棧瓦、井戸枳専用瓦、銭貨がある。これらは主に調査区西端の土坑、井戸から出土した。染付の中には焼き継ぎの痕跡がある染付椀を2点確認した。井戸枳専用瓦は、両側面にそれぞれ2箇所、柄孔を穿つ。銭は判読可能なものは「寛永通寶」・「文久永寶」の四文銭が1枚ある。

江戸時代以降のものとしては、井戸1より青色のガラス玉が9個出土した。径0.1cmの孔がビーズ状に開いており、最大径0.6cm、重さ0.179～0.268gである。

表2 遺物概要表

| 時代 | 内容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|------|----------------------------|--------|---------------------------|--------|--------|
| 弥生時代 | 弥生土器 | | 弥生土器1点 | | |
| 平安時代 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器 | | 土師器7点、緑釉陶器1点、輸入陶磁器2点、瓦器1点 | | |
| 鎌倉時代 | 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、石製品、銭貨 | | 土師器4点、須恵器1点、瓦器3点、銭貨1点 | | |
| 室町時代 | 土師器、瓦器、焼締陶器、瓦 | | 土師器11点、瓦器1点 | | |
| 江戸時代 | 土師器、染付、瓦、土製品、銭貨、金属製品 | | 井戸枳瓦1点、銭貨7点 | | |
| 合計 | | 27箱 | 41点（2箱） | 25箱 | 0箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

(2) 土器類 (図 11、図版 4)

小穴 61 出土遺物 (1~4) 1・2 は土師器皿で、1 は口径 8.4 cm で口縁端部は屈曲する。2 は口径 11.5 cm で体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部はやや丸くおさめる。1・2 ともに口縁内外面はヨコナデ、底部内外面はナデを施す。胎土は密で長石を含み、1 はチャートも含む。色調はにぶい黄橙色である。

3 は輸入磁器の白磁碗で、口径 16.6 cm、玉縁状の口縁部をもち、体部は緩やかに弯曲しながら立ち上がる。4 は青磁の短頸壺で、口径 9.0 cm である。釉薬は灰白色に近い緑色である。肩部に縦方向に 3 筋の搔き取りを施す。胎土は密で、灰白色である。平安時代後期。

土坑 64 出土遺物 (5~9) 出土遺物には土師器皿・碗・甕、須恵器鉢・甕、緑釉陶器碗、瓦器皿、輸入陶磁器などがあるが、土師器・緑釉陶器のみを図示した。

5・6 は口径 8.0・8.5 cm の小型、7 は 13 cm 前後の大型の土師器皿である。口縁部はやや内弯気味に開く。8 は小型の碗で、口径 5.4 cm、口縁部は内弯気味に開き、端部は立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデを施す。8 はやや新しい様相を呈するため、上部の遺構の混入品と考えられる。

緑釉陶器 (9) は底部のみで、高台径 7.4 cm、残存高 2.8 cm、貼付け高台である。胎土は精良あるが、1.5 mm 大の石を含む。焼成はやや甘く、内外面ともにヨコナデを施す。底部裏面の釉は剥離が著しい。碗もしくは壺の可能性もある。

井戸 69 出土遺物 (10~17) 10~13 は土師器皿である。10・11 は口径 8.1・9.7 cm の小型で、12 は口径 13.7 cm、13 は 12.6 cm の大型の皿である。10 は口縁端部を内側に屈曲させる。10・11 は口縁部内外面ヨコナデ、12 は口縁部内面ヨコナデ、13 は口縁部外面ヨコナデ、その他ナデ調整を施す。

14 は瓦器碗である。底部は欠損する。体部外面には指オサエが残る。口縁部内外面ヨコナデ、端部内側に 1 条の沈線を施す。内面はヘラミガキ調整、底部は欠損している。

15 は東播系の須恵器鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部は面をもつ。胎土は密で長石、石英を含む。

16・17 は瓦器火鉢の口縁から体部の破片である。口縁部にかけて肥厚する。17 は 16 より体部は大きく開く。16 は内外面ともにヨコナデ、17 の内面上部には楕円状の線刻が連続してみられるが詳細は不明である。それ以下はミガキ調整を施す。胎土中に長石・石英を含む。

柱穴 86 出土遺物 (18・19) 18 は口径 8.7 cm の小型の土師器皿である。口縁端部は強いヨコナデを施す。

19 は瓦器羽釜で、口径 21.4 cm である。体部から口縁部全体が丸みをもつ。口縁端部はやや肥厚し、面をもち、内外面ともにヨコナデ調整、体部外面は指オサエが残るが、内面にはハケ目調整、鏝は貼り付け後、ナデ調整を施す。外面には煤が付着する。

その他の出土遺物には輸入青磁・白磁・青白磁、焼締陶器甕、銭貨 (宋銭) などがある。

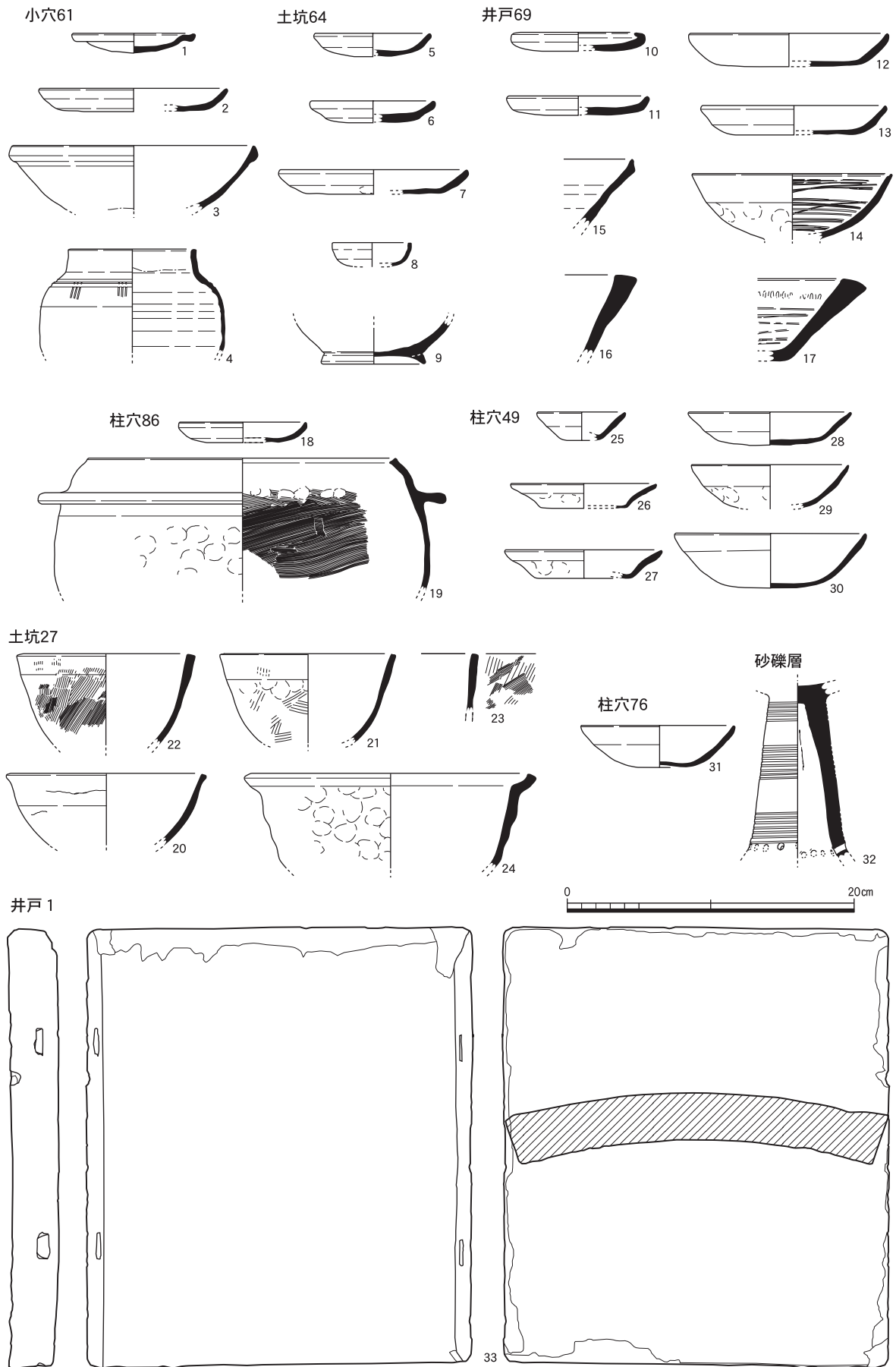


図 11 遺物実測図 (1 : 4)

土坑 27 出土遺物 (20～24) 出土遺物には土師器皿、土師質鉢、須恵器鉢・甕・壺、瓦器椀・小型羽釜、輸入青磁・褐釉陶器、焼締陶器甕があるが、図示できるものが少なく、土師質鉢を中心に図示した。

20～23 は丸底になると思われる土師質の鉢である。口径は 11.6～13.3 cm である。体部外面にはハケ目調整を施す。20 は口径が大きく、他よりも体部は開く。22・23 は内外面に煤が付着する。すべて内面は平滑で、胎土は赤褐色系である。破片数がこの遺構の中で 8 割近くを占めるが、口縁部の破片数に比べ、底部の破片が極端に少なく、全体を復元できるものはない。

24 は瓦器の鍋で、口径 19.2 cm、体部は直線的に開き、口縁部は屈曲し受け口状になる。体部外面は指オサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。

柱穴 49 出土遺物 (25～30) 出土遺物は整理箱 1 箱出土したが、大半が土師器皿であった。土師器皿のみを図示した。

25 は口径 6.0 cm で小型の皿である。26～29 は口径 10.1～11.3 cm で、29 は深めの皿である。30 は口径 13.2 cm の深めの皿である。25 と 30 は白色系、他は赤褐色系であるが、出土遺物全体は白色系の土師器が多い。

柱穴 76 出土遺物 (31) ほぼ完形に復元できた土師器皿である。口径 10.0 cm、白色系で、口縁部内外面はヨコナデ、底部から体部外面は指オサエ後ナデ調整を施す。

その他の出土遺物 (32) 弥生土器 (32) は、井戸 69 上部の攪乱にあたる底部東端の砂礫層上面より出土した。弥生時代後期前半の高杯脚部である。残存高は 12.2 cm、上から 5 条、8 条、7 条の擬凹線が巡る。脚部と裾部の境に 3 箇所穿孔がみられ、穿孔の間に 4 個の透かし孔が確認できる。

(3) 瓦類 (図 11、図版 4)

瓦類は、ほとんどが近世の棧瓦と井戸椀瓦である。わずかに中世の瓦が出土したが、図示できるものはなかった。

井戸椀専用瓦 (33) 井戸 1 から出土した。両側面にそれぞれ 2 箇所、柄孔を穿つ。

(4) 銭貨 (図 12、図版 4)

寛永通寶四文銭 (34～39) 径 2.7～2.8 cm の大型のものである。すべて背面に 11 波の波状文がある。寛永通寶四文銭は明和五年 (1768) から安政六年 (1859) に铸造される。井戸 1 からの出土である。34・35 は井戸掘形から、36～39 は埋土から出土した。

文久永寶四文銭 (40) 径 2.6 cm で背面に 11 波の波状文がある。文久永寶四文銭は、文久三年 (1863) から慶応元年 (1865) に铸造される。調査区北東部の攪乱坑を掘り下げ中に出土した。

嘉定通寶 (41) 径 2.5 cm で背面に「十」字が記される。初铸は 1208 年である。井戸 69 から出土した。

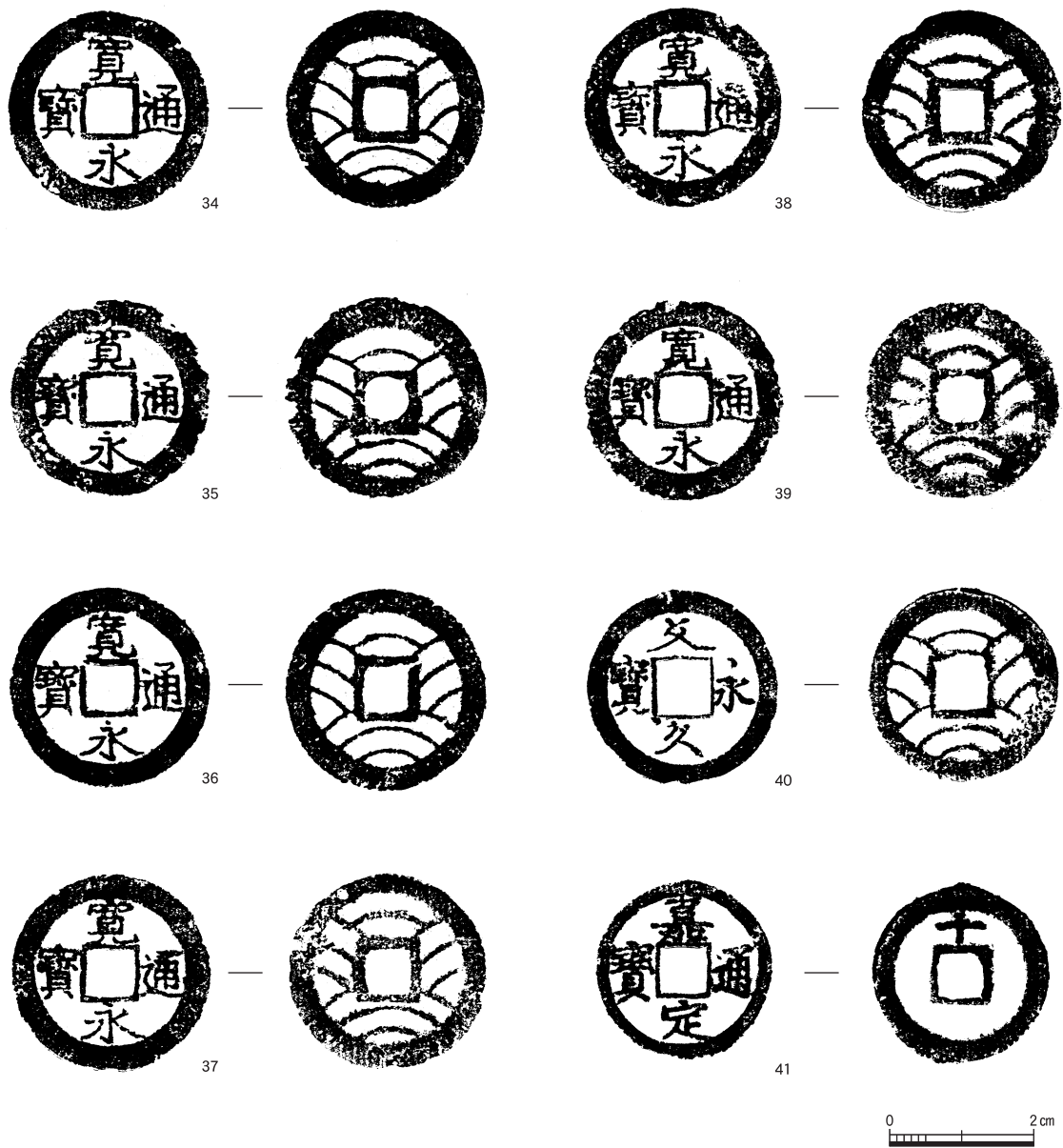


図 12 錢貨拓影 (1 : 1)

5. ま と め

今回の調査での主な遺構としては、平安時代後期・末期の小穴・土坑、鎌倉時代初頭の井戸、鎌倉時代から室町時代の柱穴群・小穴・土坑、江戸時代の整地層・井戸・建物・柱穴などがあげられる。

調査地は平安京の条坊では、堀川小路に面した宅地内に相当するが、平安時代前期・中期の遺構は皆無であった。遺構の出現は平安時代後期後半から始まり、室町時代前半にかけて盛んになる。これらは平安時代後期の整地層上面で検出した。この整地層は、自然堆積層と考える堆積層上面に敷かれたものである。整地層の下層からも平安時代前期・中期の遺構は検出されなかった。こうした状況が、この調査地内に限られたものかは不明であるが、東市の外町に該当する北西で行っ

た発掘調査では、遺構に伴わないものの平安時代前期の遺物が出土している。また、堀川通で行った発掘調査でも平安時代前期の左女牛小路南側溝が検出されている。このことから今回の調査地でも、平安時代前期の遺構が存在していた可能性はあるが、明らかにできなかった。平安時代後期に、それ以前の遺構を削平して整地を行ったか、あるいは洪水などによって削平された後に整地を行った可能性も考えられるが、今回の調査では判断できなかった。

平安時代後期・末期の遺構は少量検出されたのみであるが、鎌倉時代から室町時代前半の遺構は、重複した状態で多数検出された。特に室町時代の柱穴は短期間に建て替えがあったことを示している。出土遺物も多種多様にわたる。また当該地は、平安京の東市に隣接し、室町時代の本圀寺の寺域に東接する箇所でもあるが、今回検出した遺構が、これらの施設とどのような関連になるのかは明らかにできなかった。

本願寺関連の遺構は、掘立柱建物・整地層・井戸があげられる。建物は東西2間、南北2間分を検出したのみで、全容は明らかではない。柱穴の規模が小さいことから、一時的に建てられたものか、簡易な建物であったとも推測される。また、井戸は4基検出された。その構造から時期を明らかにできるのは、井戸枠に瓦を使った2基のみで、江戸時代後期から末期のものである。今回の調査区は既存建物の基礎による攪乱が著しく、本願寺関連の遺構はわずかであったが、境内の東端にも何らかの施設があった可能性が明らかになった。

註

- 1) 原山充志「平安京左京六条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 2) 近藤知子「平安京左京七条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年

版 图

報 告 書 抄 録

| ふりがな | しせきほんがんにけいだい・へいあんきょうさきょうしちじょうにぼうじゅっちょうあと | | | | | | | |
|--|---|-----------------|------------------|------------------------------------|--------------------|-------------------------------|-------------------|--------------------|
| 書名 | 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2007-2 | | | | | | | |
| 編著者名 | 近藤 章子 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2007年7月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| しせきほんがんにけいだい 史跡本願寺境内 へいあんきょうさきょうしちじょう 平安京左京七条 にぼうじゅっちょうあと 二坊十町跡 | きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ほりかわどおりはなやまち 堀川通花屋町 さがるほんがんにもん 下る本願寺門 ぜんちょうちない 前町地内 | 26100 | A702 | 34度 56分 17秒 | 135度 45分 10秒 | 2007年5月 22日～2007 年6月27日 | 110m ² | 防災セン ター新築 工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 史跡本願寺境内 平安京左京七条 二坊十町跡 | 史跡 都城跡 | 平安時代 | 土坑、柱穴 | 土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦器、 輸入陶磁器 | | | | |
| | | 平安時代末期 ～鎌倉時代 | 土坑、柱穴、井戸 | 土師器、須恵器、瓦器、 輸入陶磁器、石製品、 銭貨 | | | | |
| | | 室町時代 | 土坑、柱穴 | 土師器、瓦器、焼締陶 器、瓦 | | | | |
| | | 江戸時代 | 土坑、柱穴、井戸、 整地層 | 土師器、染付、瓦、土 製品、銭貨、金属製品 | | | | |
| | | | | | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-2

史跡本願寺境内・
平安京左京七条二坊十町跡

発行日 2007年7月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961